会報 結い 第8号
2012年
題字：田中幹夫

地方から新たな暮らし方を発信したい。小さな循環による持続可能な地域を市民と共につくりたい。

南砺市長　田中幹夫

「生まれて来てよかったまち　南砺をつくります」「市民幸福度、満足度の向上を協働で」と2代目の市長に就任して以来、住民幸福度・住民満足度を高めることを目指し、「不信・不満・不安」「不自然」の「不」を取り除く行政。「信頼・満足・安心」そして「自然」なかたちで、市民が主役、市民目線の行政、協働のまちづくりを進めてまいりました。

リーマンショックによる世界的な経済不況の影響が地域経済にも大きな打撃を与え、国政においては政権交代という大いなる変革に国民の期待は大きかったものの、内政、外交においてもさらに不安定な政治情勢となりました。そんな中、昨年3月11日に発生した東日本大震災という未曾有の国難により、地域経済は更なる大きな影響を受けました。

一方人口減少、少子化高齢化がさらに進んでいることから、地域構造や産業構造まで広範囲にわたって影響をきたしており、持続可能な地域社会をつくるためにも、従来のまちづくりの仕組みから新たな仕組みをつくることや、更なる行財政改革を進めて行かなくてはなりません。そんな中で山積する地域の課題を市民と行政が共に協働で取り組む仕組みづくりを提案し、少しずつその方向性が理解され、動きはじめてきていると実感しています。

まちづくり基本条例施行に伴い協働のまちづくりの手法が明確になりました。そして市から地域づくり支援員を各地域に配置し、市民と行政が協働で課題解決を進めるための方法が見いだされてきています。地域内分権制度の提唱と地域づくり交付金の拡充によって自治振興会単位でのまちづくり活動も活発化してきました。何よりも市民の皆さんの市政への参画も積極的になってきました。

また、各地域の課題解決には市民の知恵と汗と責任が必要です。行政と協働で進める「協働のまちづくりモデル事業」の実施や「南砺市まちづくり基本条例」を制定しました。リーダー養成講座「七転び八起き塾」を開講し若者のアイディアを予算化し、塾生に実践して頂いております。

又、昨年、様々な世界の問題を地域で考えようと東日本大震災後初の「第四回 ローカルサミット in 南砺」を「土徳の里からいのちの紡ぎ直し」をテーマに開催し、その中で「環境保全・エネルギー」つまりエネルギーの自給を促進しながら「農林水産業」「健康・医療・介護・福祉」「教育・次世代育成」といういのちの四分野を連動させ、その中に自立循環型のソーシャルビジネスを構築し、「小さな循環と連携」を進めながら総合的なまちづくりにつなげていく「エコビレッジ構想」の実践を発表し、本年計画策定に着手しました。地方から新たな暮らし方を発信すべく取り組んでまいります。「真の未来、日本！」のモデルとなるまちづくりを市民の皆さんはもちろん、世界の志民の皆さんと知恵を集結し、心から生まれて来てよかった、誇りに思える南砺市を目指します。

さらに合併時からICT事業に積極的に取り組み、遠隔医療のコンサルテーションや、テレビ会議システムの導入、スカイプを使ってのテレビ電話システム「ふれiTV」を開発し、お年寄り家庭への声掛けや情報発信、買い物支援等に利用しています。さらにホワイトスペース利用のエリア放送を利用し、平時は観光情報を、有事には災害情報をエリア事に発信できるワンセグ放送も導入し、さらなる情報発信から安心で豊かな暮らしを提供し、元気なまちづくりに結びつけて行きたいと思います。

さらに「さきがけて 緑の里から 世界へ」という南砺市の将来都市像の実現に向けて、豊かな自然環境、伝統に育まれた文化など豊富で多彩な地域資源を活かしながら、市民と行政が手を携えてまちづくりを着実に進めます。

日本は東日本大震災という未曾有の国難からの復興と、東京電力福島第一発電所事故から新たないのちの紡ぎ直しやエネルギーへの転換の議論が進んでいます。私たちは真の幸せとは、豊かさとは、大切なものとは、次代に残すべきものとは何かを改めて考え直し始めました。南砺市には自然環境、歴史、文化、産業、エネルギー資源等豊かな地域資源があることをもう一度考え、活かし、「ヒトづくり、モノづくり、コトづくり」に取り組み、地域の発展・活性化と持続可能なまちづくりに繋げていこうと思います。

私はこのような時代だからこそ首長の「行動と連携」が大切なのだと思います。覚悟を持った行動、決断及び市民の皆さんや企業の皆さんと他自治体首長等様々な連携をし、南砺市民の「幸福度・満足度」向上に繋げることが大切だと思います。

本市を取り巻く現状は、人口減少や過疎化・少子高齢化の進行、多発する自然災害と安全意識の高まり、地球規模での環境問題の深刻化、経済情勢の悪化、厳しい財政状況等様々な分野において多くの課題を抱えています。

そんな中で北陸新幹線の金沢開業や東海北陸自動車道の南砺スマートインターチェンジの開設など地域経済にとって大きなチャンスが訪れようとしています。そしてこの南砺には可能性が無限にあります。このチャンスを最大限に活かしながら豊かな南砺の未来に向かって進んでいきたいと思います。

ヒトにやさしいまち
ヒトががんばるまち
ヒトを幸せにするまち
こんな南砺市を私はつくります。

田中市政セカンドステージに向けて 皆さんのご支援を！

田中幹夫南砺市後援会
会長 西村亮彦氏

「生まれてきてよかった」「住んでいてよかった」「これからも住み続けたい」と思えるまちにしたいと、今から4年前の市長初当選就任以来、「市民との協働のまちづくり」を掲げ、市民との直接対話を続けながら、積極的に情報を公開し、市民の声が行政に伝わるような仕組みづくりに今日まで取り組んでこられました。市民協働で出来上がった南砺市まちづくり基本条例も7月1日から施行されましたが、これらも市長の力強いリーダーシップによるものです。

また、対外的にも南砺市のトップセールスマンとして、あらゆる機会を利用され、様々なメディアに南砺市が取り上げられるようになったことも大きな成果です。

さて、田中市政セカンドステージに向けていよいよ走り出しました。田中幹夫南砺市後援会・なんと結いの会と致しましても全会員の総力を結集し、この実現に向かってまいります。皆様方のご支援ご協力を賜りますようよろしくお願いします。

◆財政健全化にも力を入れています。

借金（起債残高）80億削減
貯金（基金残高）55億増額　合計135億
実質公債費比率　19.8%（H20）を12.4%（H23決算）
大幅に良くなっている。

【資料】

起債残高	全体	945億（H20）＞865億（H23）	80億減
	一般会計	437億（H20）＞416億（H23）	21億減
実質公債費比率		19.8%（H20）＞12.4%（H23）	7.4%減
財政調整基金残高		44億（H20）＜64億（H23）	20億増
減債基金残高		19億（H20）＜54億（H23）	35億増
職員数		1,156名（H20）＞1,086名（H23）△70名	
		＊給与実態調査より（各年度4月1日現在）	

H22年度から3ヶ年で事務事業見直し中（行政評価導入支援業務着手）

統合保育園、4小学校統合＞2小学校（平成26年度平・上平小学校統合後）

2中学校統合　消防署所再編　方向性決定。

ゴミ処理場も方向性を決定。2012年10月よりRDF製造中止。

公共施設の再編にも積極的に取り組んでいる。

シリーズ 対談

ものづくりの連携と新市場の開拓へ。

メイド・イン・南砺の育成をめざして。

若手工芸士・作家との意見交換会

田中幹夫（以下：田中幹）：今後、南砺市としても、ものづくり分野に力を入れていきたいと思っています。そこで今回は、伝統を受け継ぎながら、新たな制作活動にも取り組んでいる若手工芸士・作家さんたちをお招きしました。

この分野を市の事業として予算化し、取り組んでいくために、まずは皆さんの仕事内容や思いを聞かせてください。

小原好喬（以下：小原）：私が継承する「城端蒔絵」の創業は天正3年。以来、437年の伝統があり、私は16代目です。

ただ技術や技法を身につけたり、先代と似たような作品を作ったりするだけでは、伝統工芸を継承するとは言えません。古くからは茶道具や曳山の装飾に用いられてきた漆ですが、私は現代のライフスタイルに馴染むようなアイテムも提案しています。蒔絵ボールペンもその一つです。

田中幹：曳山という無形文化財に関わる技術を継承しながら、現代に合った作品づくりも欠かさないということですね。

小原：そうです。蒔絵は日本独自の装飾技法で、もともと金粉銀粉を使います。しかし、藩政時代に加賀蒔絵の技術を保護しようと、加賀藩が金粉、銀粉の使用を禁止しました。すると使えるのは朱・黒・茶・黄・緑の5色のみ。先人はこれらの色を研究してぼかしの技法を考案するとともに、城端蒔絵の代名詞ともいえる白漆が誕生しました。

古典作品の研究や歴史を学び、自分に何ができるかを日々模索しています。

田中幹：なるほど。木彫刻師の田中孝明さんは、小原さんと高校の同級生なんですよね？

田中孝明（以下：田中孝）：はい。私は高校卒業後に井波彫刻の修業をし、現在は受注制作の傍ら、少女モチーフなどの人物作品も彫っています。

松井紀子（以下：松井）：私は庄川で初めて田中さんの作品を拝見し、その独特の雰囲気に感動しました。

田中孝：ありがとうございます。私は井波彫刻の徒弟制度に沿って、師匠のもとに5年間弟子入りし、お礼奉公としてさらに2年働き、それから独立して現在16年目になります。その高みを目指す若手職人もいれば、別の方向として、彫刻の技術を用いて現代に合う自分らしい作品を制作するという2つの流れがあるように思います。私は、後者である自分の思いを形にするような作品づくりを心がけています。

井波彫刻はもともと受注生産で、1対1のやりとりの中から作品が生まれます。私の工房では、お雛様や五月人形の受注も年々増えています。「孫が生まれたんだけど、あなたの作風でお雛様を作ってくれないか」と、お客さんよりリクエスト（思い）をいただき、「ほっぺを孫に似せてほしい」という要望もあれば、写真を横に置いて彫ることもあります。

田中幹：和田さんは、五箇山和紙の里で紙漉きから販売営業までされていらっしゃいますね。

和田義久（以下：和田）：五箇山和紙の里は、昭和57年に平村が和紙工芸館を設立したことから始まります。当時は、冬場の道に雪が積もると近隣の町へ働きに出られず、また和紙文化も廃れかけていました。そこで、地場産業の活性と若者定住対策として設けられました。私は、その第一期生となります。「紙を漉け！勉強せぇ！」と毎日言われました。

そのうち、世界遺産・相倉合掌集落に修学旅行生が訪れるようになり、徐々に和紙体験を手伝う機会が増えていき、ピーク時には1年で1万人の体験者が和紙の里を訪れていました。

田中幹：五箇山和紙は現在3組合が残っていますね。五箇山和紙という名は有名ですが、現在は和紙のアイテムも注目を浴びています。

和田：そうですね。例えば和紙の名刺入れ。先人の知恵を使い、こんにゃく糊を混ぜて揉んでいます。こうした加工をすると、風呂敷代わりに、大きな和紙を使ってものを包むこともできます。五箇山和紙のウエディングドレスというのもあります。

田中幹：ランプシェードやドレスなど、活用されているんですね。

和田：今までを振り返ると、五箇山和紙は観光客の体験やお土産に力を入れすぎて、私も30年間、紙を漉いていますが、やはり商品にして販売するという部分が弱いと感じています。

田中幹：伝統工芸の分野では悠久紙が桂離宮で使われていたりしますね。松井さんは、現在どのようなことを？

松井：私は東京での勤めを経て2年前にUターンし、家業に携わるようになりました。城端は約430年前に絹織物が盛んになったと言われています。なかでも歴史ある生産品目のひとつ「しけ絹」は、緯（よこ）糸に節のある玉糸を用いるため、節のある独特の風合いが特長です。

　通常は一頭のお蚕さんが一個の繭を作るのですが、まれに二頭のお蚕さんで一個の繭を作ることがあります。その繭を玉繭と言い、その玉繭から作った玉糸で織った生地を「しけ絹」と呼びます。現在は3％以下しか玉糸が作れないため、希少なものとなっています。

　またもう一つの特色として、しけ絹の「絹紙」作りが挙げられます。絹紙は、絹織物に和紙を裏打ちしたもので、主に襖などの建具に使われます。現在、国内で絹紙を作っているのは福井県の機業を含む2社のみ。うちは織りから行うのでアレンジも自在です。

田中幹：絹と言えば着物のイメージが強いですが……。

田中幹：最近、しけ絹の新しいアイテムとして、スマホクリーナーやチーフが登場しましたね。これらの商品は、松井さんがUターンする前からあったんですか？

松井：以前は、絹シェードの開発くらいでした。

　新商品は百貨店に展示することもありますが、販路開拓に悩んでいます。

使うことでクオリティの高さを実感

田中幹：若い方の発想で、クオリティの高い“本物”のアイテムを日常で使うことができ、私の中で蒔絵やしけ絹のイメージも変わりましたね。

小原：「どんな作品を作っているんですか？」と訊かれた時に、蒔絵ボールペンなら胸ポケットから出せますよね。さすがにナツメ（茶道具）を持ち歩くことはできませんから（笑）。

田中幹：小原さんのボールペンは芸術作品であり、日常の道具でもあるんですね。

小原：道具は使ってもらってなんぼ。蒔絵は高価で、手入れが大変だと思われがちです。しかし漆は傷がつこうが退色しようが、磨けば直せます。この天然の素晴らしさを多くの方に知っていただきたいのです。

田中幹：小原さんの漆のぐい呑みや塗り箸も、やはり使い勝手がよいですね。

松井：私は学生時代、絹をただ古くさいものだと思っていました。それが、上京した父と営業回りをした際、紫外線に強いことや、調湿性があることを知って、イメージががらりと変わりました。絹糸って、手術の糸にも使われているんですよね。そんな絹の機能性も、ぜひ使い手の方に感じていただきたいと思っています。絹のス

対談者一言紹介

小原 好喬

城端蒔絵 塗師屋治五右衛門16代目。2006日本工芸会正会員に認定される。作品制作、曳山修復などを手がける。（南砺市金戸）

田中 孝明

木彫刻師。漆芸家の奥様と工房兼ギャラリーの「トモル工房」を運営の他、国内外で作品制作を行う。（南砺市（井波）本町）

カーフは家庭用柔軟剤で洗えるし、きれいに干せばアイロンいらずなんですよ。

本物であること、受け継ぎたいもの

小原：私は、漆は下地からすべて本物を使いたいと思っています。コストがかかるので、商売にはなりづらいのですが……。

人間国宝である私の師匠がおっしゃるには、蒔絵に今後求められているのは、“常に本流を歩め”ということだというのです。漆は英語で“ジャパン”ですからね。

田中孝：そうですよね。南砺市の良いところは「本物であること」なので、この部分は大切にしたい、と思っています。

小原：城端の曳山は、総合芸術、つまり当時のコラボレーションなんですよね。漆、金工、木彫、大工などの技術が結集しているんです。きっと当時の職人たちも、個人同士で話し合い、知恵を出し合って制作し、その成果を共有したんだと思います。修復に携わっていると、先人たちの技だけでなく、心が伝わってくるんですよ。

田中幹：金沢市の21世紀美術館は、金沢の伝統を継承しつつ、将来の金沢をどうするか、という考えで建てたそうです。100年後の芸術を後世につたえたいと。ある意味、新しい取り組みです。

曳山作りにしても、430年前の当時は、画期的なことをやっていたのかもしれませんね。つぎはわれわれの番、何を残していくか。新しいものをつくっていくパワーが求められています。

小原：やはり地元の宝物は、地元の人の手で守っていきたい、私はそう思います。

20代の頃、展覧会活動に夢中でしたが、あまり自分の仕事にピンときていませんでした。そんな時、城端の曳山修復を高山や輪島でやるという話を聞き、それは変だと思いました。そこで、地元のメンバーを集めて修復チームを作ったんです。曳山の修復施設もなかったので、市長にも場所の提供を求め、提供してくださった。実は全国の山車の保存会には、保存するところがあっても修繕するスペースがあまりないんですよね。

田中幹：例えば愛媛の木屋旅館でも、みんなで再生しようと、東京のメンバーが終結したそう。東京でも、同じことを考えている人がいっぱい集まったんですね。

ネット商店の可能性

田中幹：皆さんの共通の悩みとして、「販路はどうしていくのか」という問題がありますね。そこで私は、南砺らしい“ものづくりの新たなジャンル”を作ればいいと考えています。佐賀県武雄市では、Facebookでネットショップを運営し、選ばれたセンスのいいものが並んでいます。こういったネット上の商店を200の市町村に作ろうと、検討委員会が立ち上がりつつあります。相互連携することで、「いいね！」を押す人がどんどん増え、シェアされどんどん拡がるのではと思っています。

南砺市のFacebookショップは行政がやるので、商店の手数料負担はなしで参画していただくことになりそうです。売れ出すと、独立していただいてもいいのです。

和田：和紙の里では、高岡地域地場産業センターにギフト商品を納めているのですが、すぐ品切れになるんです。

南砺市の工芸品で3,000円程度のギフトを作れたらいいと思います。

和田　義久

和紙職人暦30年の伝統工芸士。道の駅たいら「五箇山和紙の里」勤務。
（南砺市東中江）

松井　紀子

㈱松井機業の6代目見習い。しけ絹商品を開発。全国の百貨店などへ提案。
（南砺市城端）

南砺のゲストハウス作りと空き家活用

田中幹：井波の大手ドアメーカーの社長に聞いたのだけれど、中国ではアパート購入者が増えていて、そのアパートでも柱以外の建具を全部受注するそうです。

それにヒントを得て、将来は南砺市の工芸技術を活かした“ゲストハウス”を作れたらと考えています。仏壇や欄間も借りてきて、合掌造りのゲストハウスに。

小原：南砺の食を南砺の器で、もてなして。

田中幹：そこで工芸品も販売できたら。

松井：ありがたい話ですね。実は百貨店の催事に出ると、「城端へ行けばお店があるのですか？」とよく聞かれます。機業場はあっても、お店は経営していないので。

田中幹：確かに、南砺市の工芸品をどこに売っているか聞かれても、城端の販売店でも売り切れ続出ですよね。

その点、田中さんのトモル工房は、工房兼販売所にもなっていてよいですね。

古い民家を利用して、彫刻を見ながらお茶ができるカフェというのはどうでしょう？

田中孝：使っていない民家に芸術家が入りたいとなったら、家賃や改修費の補助など、若手彫刻師たちは、なかなか家を貸りられず困っていますので助かるかと。貸す側の大家さんにもプライドがあるらしく、修復しないと貸せないという方もいらっしゃって。若手は今の状態でいいので、安く借りたいと思っています。市で空き家を管理してもらって、仲介してもらえるだけでもありがたいですね。

和田：山間部のほうでも、家を貸すのに抵抗のある方が多いようです。普段は平野部に住んで、土日だけ山に帰るという方も。そうすると、冬の間に雪で家がつぶれることもあります。

メイド・イン・南砺の育成をめざして

田中幹：これからは、南砺市近隣のデザイナーやクリエーターとコラボして、パッケージなどのデザインやマーケティングについて考える必要がありますね。

私は、今まではバラバラにやっていたものを、“なんとブランド”として、育てていきたい。皆さんに手間をかけないためにも、そういったクリエーターを募ることが行政の仕事だと思っています。ただ親方から言われたものを作るだけでなく、作り手の思いや表現したいものをどう作品に盛り込んでいくかが、作り手と使い手の満足感の向上につながると思います。作り手の満足や幸福感が使い手にも伝わる、「メイド・イン・南砺」を、一緒に育てていきましょう。

本日はありがとうございました。
（平成24年8月6日 小原 好喬さん宅にて）

別冊Discover Japanに南砺市が掲載されました！

日本の魅力、再発見をテーマに、宿、食、工芸、旅など世界に誇る日本の文化を紹介する「Discover Japan（ディスカバー・ジャパン）」

9月18日発売の『別冊Discover Japan 新しいニッポン観光』に南砺市があげられ、編集部イチオシの知られざる地域のひとつとして、大ボリュームで紹介されています。“地域活性化に ホンキで取り組み、成功させてきた人たちのインタビュー集”には、田中市長が登場しています。「人が好き」の田中市長の人脈が着々と成果につながってきている、ひとつの事例といえます。　エイ出版社 1,260円

全国の首長に聞く シリーズ 第2弾

地方から日本を元気にする

佐賀県武雄市長 樋渡啓祐 氏

私は、人格も最悪、組織を動かす手腕もなく、また組織のヒトをつなぎ止める包容力もない。だから、それらを兼ね備えたヒトを毛嫌いし、遠ざける向きがある。

田中南砺市長は、私が「毛嫌いする」そんなヒトなんですね。だけど、田中市長は、私のつくった心の壁を軽々と乗り越えてしまいました。

「なんてヒトなんだ」

聞くところによると、田中市長の家は代々「結（ゆい）」とよばれる地域共同体のリーダーを勤め上げてきた家系であるとのこと。その歴史は500年とか。田中市長の今は必然なんですね。

話せば話すほど、その魅力に魅了されていく。そして同じ市長として憧れにも似た感情を持つようになったんです。だけど、無理ですね。田中市長のようには到底到達できない。あきらめました。（笑）

ともあれ田中市長のおかげで、南砺市と私たち武雄市とは仲良くさせてもらっています。タイプは違えど「地方から日本を元気にする」という目指すものは同じです。田中市長のもと南砺市と武雄市は連携を深め、元気な町づくりに邁進していきたいと思います。

●プロフィール

佐賀県武雄市長。1969年（昭和44年）生まれ。東京大学経済学部卒業後、総務庁人事局（現総務省）入庁、内閣府参事官補佐、総務省大臣官房管理室（公益法人改革担当）参事官補佐、高槻市市長公室長等を経て、2006年4月より現職（当時現役最年少）。日本の基礎自治体として初めてFacebookサイトを開設、公立図書館をTSUTAYAに運営委託するなど、先進的事例を生み出す日本でも大変有名な首長。

日本再生の同志として

神奈川県小田原市長 加藤憲一 氏

深刻な課題が山積みの日本。この局面を突破していくには、それぞれの地方都市が持てる資源を十分に活かして、真に持続可能な社会の姿を、地域の現場から創り出していくしかない。志ある多くの首長は、そう思い挑戦を続けると共に、その志を共有できる同志として、首長間の連帯を強めています。私は田中市長と、小田原や南砺で開催された「ローカルサミット」を通じてご縁を頂き、出会い、これまで親交を深めてきました。

東日本大震災と言う、天が私たちに与えた過酷な試練の中、被災地である福島県相馬地方への支援を早い段階から積極的に行ったり、いのちを守るために再生可能エネルギーの推進を進め、ともに「エネルギーから経済を考える経営者ネットワーク会議」の顧問を引き受けたり、地元にあっては、持続可能な地域コミュニティのモデル作りに意欲的に取り組むなど、私と田中市長の政治理念や、目指すべき地域像は、小田原と南砺の地理的な違いこそあれ、かなり共通しています。

大きな体躯、屈託のない笑顔、人懐っこいお人柄に加え、しっかりしたビジョンと行動力をもって、南砺の可能性を着実にカタチにしている田中市長に、私は心から敬服し、また刺激を受け、励まされています。雪深い利賀の里で生まれ育ち、郷土の人たちの苦労を知り抜き、その中で育まれ鍛えられてきた揺るぎない絆を信じ、南砺を心から愛していることを、田中市長の立ち振る舞いから感じます。南砺市民の期待に応えていく人材であることは勿論、この国の進むべき道を、身を持って示していく方であろうと確信しています。

南砺と小田原。これからも、田中市長と切磋琢磨し、励まし合い、良い意味で競い合いながら、地域の現場から日本を再生する、その同志として共に歩んでいきたいと思っています。

●プロフィール

神奈川県小田原市長。1964年（昭和39年）生まれ。京都大学法学部卒業後、経営戦略コンサルティング会社に入社。31才の時には自給自足を目指して独立。傍ら民間教育団体事務局長、小田原市政策総合研究所市民研究員や小田原インキュベーションフォーラム事務局長など多方面にわたり、小田原のまちづくり活動に取り組む。2004年、39歳の時には小田原市市長選挙に無所属で立候補するも、現職に約6,000票差で敗れる。しかし、その後も地域活性化のためのシンクタンク会社を設立するなどして、2008年5月の小田原市長選挙に無所属で立候補し初当選。以来、現在市長2期目にて活躍中。高校時代には山岳部部員としてインターハイに出場するなどのスポーツマン。

田中幹夫の素顔に迫る シリーズ 第2弾

田中幹夫は私の老後人生を変えた男

NPO法人利賀飛翔の会事務局長 吉田 亜輝男氏

私は10年程前、東京から南砺市利賀村に移住して来ました。その2年前、2000年に「日本海時代の祭典」という団体の催しが利賀村で開催されました。これは年に一度日本全国の過疎に近い村などを訪れ、村人と交流する企画を30年もやっている団体でした。私は東京在住でしたが、昔からの友人の奥野達夫氏（現在福光美術館館長）に紹介され参加しました。全国から40名位の参加者がありました。当時利賀村の語り部だったご老人の野原ことさんの話を聞いたりと有意義な3日間でした。夜は「そばの郷温泉旅館」で懇親会があり、当時の村役場からも3・4人の方が参加されていました。その中に、大変ユニークで面白い人物が居て、私もつい思わず話に引き込まれました。村の将来の話や、諸々ユーモアを交えて語る彼に大いに魅力を感じたものです。その人が田中幹夫だったのです。

その2年後、私は迷わず利賀村に移住しました。老後を里山で暮らしたいと思っていた私は、全国の魅力的な地を探していましたが、利賀村に来ました。幹夫君の居た上畠に出来た村営住宅に住まわせてもらいましたが、彼はよそ者にもやさしく、集落の恒例の「そば会」などにも参加させてもらい、彼の指導でそば打ちもするようになりました。そばといえば、全国の素人そば打ちの段位を認定する「全麺協」（初段から5段までであり、5段は全国で20人しか居ない権威ある団体）にも彼は尽力して来ました。全国でたった2回しか実施されていない5段位の認定会は2回とも利賀村で開催されました。

そば打ちに限らず、彼は利賀での数々のイベントを実質的にはすべて仕切り積極的に行動して来ました。田中幹夫が号令をかければ、村の若い衆は勿論、皆集まって活気が生れました。指導力、思いやり、物事の軽重の判断、人懐っこさ、を持ってる男だと言う事は先刻、皆さんもご存知の通りです。利賀村にも、南砺市全体にも大自然や、伝統ある文化、かけがいの無い多くの魅力があり、数年前とちがって大都会の人間から見直されていることは事実です。

しかし、都会から人を呼び、住んでみたい、と思うようにするには住民だけでなく、指導者が必要です。田中幹夫の人間性にほれて移住した私のように。

「日本維新の会」が話題になっていますが、まさに人間力が必要とされているのでしょう。現代の坂本龍馬は田中幹夫です。今後とも大いに期待します。

フレーフレー幹夫！

第4回 YUI CUPパークゴルフ大会

9月9日 IOXアローザ パークゴルフ場において第4回YUI CUPパークゴルフ大会開催されました。
大勢の皆様にご参加いただきありがとうございました。

田中みきおパークゴルフYUI CUP結果

【男子の部】 1位：高戸収次 2位：湯浅幸雄 3位：高田秀雄
【女子の部】 1位：辻脇よし子 2位：土井妙子 3位：川口みよ子

男性の部優勝 高戸さん

女性の部優勝 辻脇さん

『なんと結いの会 平成24年会費』のお願い

・田中幹夫本人が代表を務める唯一の政治資金管理団体です。
・会員は個人とします。
・年会費は、１口1,000円からとし上限は30口30,000円までとします。
※田中幹夫の政治活動を資金面においてご支援賜りますようお願いいたします。
※会員入会のお申込みについては、田中幹夫事務所にお問い合わせください。

会員には年２回発行の会報誌をお届けします

振込先

○なんと農業協同組合	西部支店	普通００１９６７６	なんと結いの会
○福光農業協同組合	本店	普通００６０５８４	なんと結いの会
○となみ野農業協同組合	井波本町支店	普通００１３３８８	なんと結いの会
○北陸銀行	井波支店	普通６００３１７０	なんと結いの会
○富山銀行	井波支店	普通２１１６０９８	なんと結いの会
○ゆうちょ銀行		00750−9−76579	なんと結いの会（払込取扱票をご利用ください。）

なお、振込手数料は各自にてご負担いただけますようお願いいたします。

田中幹夫事務所
〒932-0231 南砺市山見746-3
TEL 0763-82-5296
FAX 0763-82-5294

田中幹夫オフィシャルサイト
URL■http://www.tanakamikio.jp
E-mail■office@tanakamikio.jp
田中幹夫後援会HP
■http://kouen.tanakamikio.jp